本願に生きる

宮城 顗 講述

本願に生きる【目次】

真宗における個と公 7

「個」と「公」 9
無三悪趣の願 10
地獄 13
餓鬼 17
畜生 23
問われる「個」 25
外なる「公」 29
「公」とは 35
吹きこまれてきた「公」 37
存在の本質にみる「公」 42
群萌—覆われてあるもの— 44
主観性を破るもの 48
法蔵という名 52
真土 54
願の成就 57

本願に生きる 61

自信教人信の世界 63
どこで一切衆生といえるのか 68
御同朋—一切衆生をみる眼— 75
一人ひとりを「公」とする世界 79
一闡提—信の具体性を問う存在— 84
唯除 89
一闡提という存在 94
他者なき共同体 97
信順を因とし疑謗を縁とする 104
真仏土と化身土—本願酬報の世界— 106
応化の願心 111
本願を聞くという歩み 114
娑婆、この厳粛なる世界 121
あとがき

真宗における個と公

「個」と「公」

私に与えられているのは、「この国の現実にあって、われら法蔵の願心を聞かん」という大変なテーマです。そのテーマを受けて、ひとつ考えていただきたいと思っておりますことは、いわゆる「個」と「公」という問題です。たとえば小林よしのり氏の『戦争論』という個と公をテーマにした劇画があります。その『戦争論』に対して、いろんな方が発言されています。たとえば吉本隆明氏は小林氏の公性というものを否定し、批判されているのですが、私には吉本氏の公論も納得のいかないものがあります。

そこに何か、親鸞聖人の教えをとおして、私どもが明らかにしていくべき「公」とは、一体どういうことなのか。いわゆる「僧伽論」といい、「同朋会」といっても、どうも教団内思考といいますか、教団の内に属しているものの中の捉え方にとどまってしまうのも、もうひとつ私ども

小林よしのり（1953―）
漫画家。一九九二年から「ゴーマニズム宣言」、「新ゴーマニズム宣言」を連載。一九九八年「新ゴーマニズム宣言」のスペシャルとして『戦争論』を刊行。七十万部を超す売り上げを記録する。また、二〇〇一年に『戦争論2』二〇〇三年に『戦争論3』も刊行している。

吉本隆明（1924―）
文芸評論家・詩人。小林よ

しのり氏の『戦争論』に対して、一九九九年『私の「戦争論」』を刊行する。著書『最後の親鸞』『共同幻想論』ほか多数。

藤元正樹（1929―2000）山陽教区圓徳寺。元真宗教学研究所所員。著書『解放への祈り（正・続）』『願心を師となす』（ともに東本願寺出版部）ほか多数。二〇〇〇年四月十六日逝去。

に公という問題がはっきりと問われていないからではないのか。そのことがずっと頭にありました。

いうならば、自己一人の上に成就する信心が、人間の現実に対していかにして公なるものとして成り立ち得るのか、開いていくのか。ともかく、この講題をとおした私自身のテーマとしては、そういう公性という問題を本願、法蔵菩薩の願心の歩みの中にたずねてみたいと思っているわけです。

無三悪趣の願

「この国の現実にあって」とあります。現在、まさしくこの日本という国の現実は、大変な問題が次から次と噴出しています。その一つ一つをとても具体的に取りあげることはできないわけです。ただ、「現実」という言葉について、藤元正樹君から教えられたことですが、現実というのは現に起こっている事件とか事柄、現象、そういうものではないと。

『無量寿経』の異訳経典　古来「五存七欠」といわれ、十二の漢訳があったといわれる。現在、完本としては五本の漢訳があり、翻訳の順序によって列挙すると、『大阿弥陀経（仏説諸仏阿弥陀三耶三仏薩楼仏檀過度人道経）』、『平等覚経（無量清浄平等覚経）』、『無量

そうではなくて事件や事柄、現象となって現れている真実。あらゆる具体的な事柄となっている真実、それを明らかにする。それをたずねていくことが現実を問うということだと教えられたことがあります。仏教では「現行」という言葉を使いますが、現実とは現行する真実、現に展開している真実です。

そこに現実の個々の問題ということをとおして、本願の教えにたずねますと、まず四十八願の第一願、いわゆる「無三悪趣の願」です。「国に地獄、餓鬼、畜生なからしめん」という三悪趣ですね。

たとい我、仏を得んに、国に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覚を取らじ。

（『無量寿経』真宗聖典一五頁）

いわゆる『無量寿経』には異訳経典が今日五つ伝えられているのですが、それはひとつの歩みをもって展開していると教えられています。『大阿弥陀経』、『平等覚経』という二つの経典は本願文が二十四願ですが、『荘厳経』が三十六願、『如来会』と『無量寿経』が四十八願。こういう展開をもっているわけです。そこに経典の移りゆきの中で消えていった願文、逆に新たに付け加わった願文、そしてその順序次第もいろい

寿経（大無量寿経）」『如来会（無量寿如来会）』、『荘厳経（大乗無量寿荘厳経）』となる。最初期の『大阿弥陀経』は二二二年～二五三年の間の訳出であるといわれ（ただしこれ以前の訳出との説もある）、最新とされる『大乗無量寿荘厳経』は九九一年の訳出である。

ろ変わっているのですが、どの異訳経典にあっても「無三悪趣の願」から願文の歩みが始まっている。訳出された年代をざっと計算しますと、最初の訳からいちばん新しい訳まで、約一千年の隔たりがあるのですが、その一千年の歴史を貫いて、「無三悪趣の願」から歩みが始まるということは変わっていないということがまず注意されます。

つまり、本願というものが発こされ、そして歩むもととなったものは、この三悪趣の現実でありましょう。人間社会の現実、それが三悪趣として押さえられ、そしてその三悪趣の現実を深く痛む心、深く悲しむ心から発こされてきているものが本願だと言っていいかと思います。

その三悪趣の「趣」は、環境というよりも境遇です。環境というときは客観的に押さえるという面が強いのですが、境遇というときは「私の境遇」です。一人の人間において具体的に生きられている生活状況、社会状況というものを境遇と言っていいかと思います。それは文字どおり、この現前の境遇、自分自身をそこに見出してきたものとして押さえられる。そういうものを表しているのが「趣」という言葉です。

そして、「悪」というのは、善悪というより嫌悪という意味の文字で

源信僧都（942―1017）
七高僧の一人。比叡山横川の首楞厳院で末法思想を背

す。人間として嫌悪すべき境遇です。嫌悪すべきということは、悲惨なと言っていいでしょう。「人間として悲惨な境遇」。それを一口で言えば、人間性を失わずには生きていけない。人間性が奪い取られていくような境遇ということを意味していると思います。

地獄

三悪趣ということは地獄、餓鬼、畜生という言葉で表されるわけですが、「地獄」（naraka）は音を移して奈落とも言われます。地獄という文字から言えば、「地」とは下底、「獄」は拘束。つまり、私たち人間存在というものをいちばん底辺において拘束しているもの、そういう状況、そういう世界を意味するわけです。

たとえば、地獄について「八大地獄」ということが説かれますが、八大地獄の最下底が「無間地獄」です。源信僧都は『往生要集』の中で、無間地獄の苦しみというものをこういう言葉で押さえています。